

## 先進国の人々の共感に頼らなくても、 生活できる社会をつくる。 途上国で「スポーツ×開発」を 行う意義はそこにある。

サッカーやラグビー、テニスなど、多くの競技が世界各国で浸透し、オリンピックをはじめとする国際大会で各国のトップ選手が力を競う現在。人々を惹き付けるスポーツの魅力を活用した途上国開発プロジェクトも、各地で盛んに展開されている。スポーツは誰もが平等に参加できるもの、スポーツはさまざまな民族をつなぐ存在、その謳い文句は真実なのか。そして先進国目線の、感動的なプロジェクトは本当に現地の人々に役立つのか。南太平洋に位置するバヌアツ共和国に四半世紀以上関わってきた小林先生は、「スポーツ×開発」のあるべき姿を追究し続ける。

## 「プレーを楽しむ」 バヌアツの選手に スポーツの原点を見る

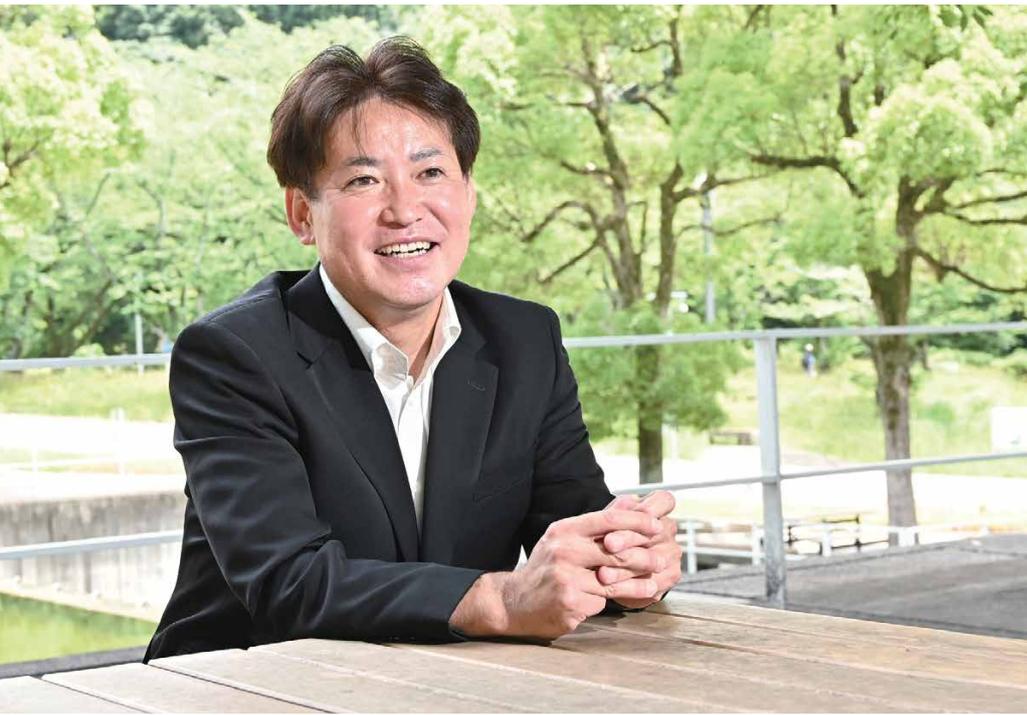
子どもの頃からサッカーに親しんでいた先生は、地元の強豪校から筑波大学に進学し、Jリーガーや日本代表選手を多数輩出している名門・蹴球部に入部。大学院在学時に進路を模索していた時にたまたま、バヌアツ共和国のサッカーオリンピック代表に日本から派遣するコーチを募集していることを知り、応募した。バヌアツ共和国は、イギリスとフランスが共同統治する時代を経て1

980年に独立。外貨を稼ぐ手段に乏しく、経済規模がとて小さい。いわゆる途上国に分類されることとなり、日本や他の先進国のような状況ではないことは承知の上で向かった先生は、予想以上の現実に驚かされた。練習や試合の舞台となるスタジアムの老朽化といった環境面はもちろん、国を代表するチームでありながら練習時間にメンバーが揃わない、暑いと練習中でも勝手に休んでしまう、などの規律面の問題も大きかった。「これはサッカーを教える以前の話だと思いました」と先生は苦笑する。定められた時間を守る、

メニューに従ってトレーニングを行う、といった先進国では当たり前なことを初歩からレクチャーする一方、ふと不思議な気持ちにとられることもあった、と先生は続ける。「彼らはサッカーを心から楽しんで、何の責任もプレッシャーも感じずにプレーしている。彼らと過ごしていると、自分はこんな風にサッカーを楽しんできたのだろうか、スポーツの原点とは実はこういう姿なのではないだろうか、という気分になってくるんです」

## 「先進国と途上国は 真に平等なのか？」

やがてオセアニア地区予選が開幕。当初は楽観的だった選手たちも他国との圧倒的な力差を見せつけられて意気消沈、試合当日の朝に「体調が悪い」と訴える者も少なくなかったという。「ですがそれも当たり前前だと思いました。オーストラリアやニュージーランドといった先進国とバヌアツでは、そもそもの生活基盤や練習環境、得られる知識に大きな差がある。バヌアツなどの途上国のチームが対等に戦おうとするなら



小林 勉 (こばやし つとむ)

筑波大学体育専門学群卒業。同大学大学院修士課程体育研究科体育方法学(スポーツ社会学専攻)修了。名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程国際協力専攻修了。信州大学教育学部専任講師、中央大学総合政策学部准教授等を経て、2014年より中央大学総合政策学部教授。専門はスポーツ社会学、スポーツ政策論、国際協力論。著書に『2020 東京オリンピック・パラリンピックを社会学する：日本のスポーツ文化は変わるのか』(共著、創文企画)、『スポーツで挑む社会貢献』(創文企画)など。2019年、日本計画行政学会・学会賞(論説賞)受賞。

ば、先進国から莫大な援助を受けて環境を整備するか、若い人材を先進国に送って専門家集団の中で鍛え上げるかしか恐らく選択肢がない。先進国の競技者養成システムに取り込まれていくよりほかに道がないのです。オリンピックなどの国際大会は

平等を謳いますが、スポーツにおいて先進国と途上国は本当に平等なのかと疑問を感じましたね」  
しかし一度だけ、強豪相手に満足のいく結果を出すことができた。対ニュージールランド戦で、前半は0対5だったものの後半を1対0で終えら

れたのだ。この時、いつもは底抜けに明るいバヌアツの選手たちが泣いた。一緒に涙を流しながら、「これを良い思い出にしてはならないと心底思った」と先生は言う。「現地で約2年過ごすうち、この国が本当に好きになり、人々に幸せになってほしいと思うようになりました。反面、自身のサッカーとの関わり方や、スポーツのグローバル化などについて振り返られることも多かった。バヌアツに何か恩返しをしたい、そう考えて、国際開発とスポーツとを結び付けて研究することを思い立ちました」  
帰国後、先生は名古屋大学大学院に進学。その一方で、バヌアツで得た知見などを日本サッカー協会などに積極的に発信していった。「当時、世界的に統一されたルールの下で展開されているスポーツは多様な民族をつなぐ存在になり得る、という言葉が広がっていました。けれどそれは「平等な条件下における競争」であることが大前提であ



り、それを展開するために必要な所得や資産、知識、技術は不平等な状態にある」ことが完全に見過ごされていた、というのが私の問題意識でした。また、バヌアツのような途上国に押し寄せているグローバル化したスポーツの実態を、当時の日本人々はまったく知らなかった。世界でこんなことが起きていると、多くの人に知ってほしかったんです」

### スポーツのチカラは時に 国家の課題も解決に導く

研究する中で明らかになったのは、先生がバヌアツのサッカーコー

現在、バヌアツが国として定めているスポーツポリシーは、先生の研究が反映された内容となっている。

チとして実感した「スポーツのグローバル化における負の側面」ばかりではなかった。

バヌアツを例に挙げると、スポーツが「国民意識を創り出す」機能を発揮した。独立以降、バヌアツでは国家を統合する力の脆弱さが課題の1つとなっていた。「バヌアツは多くの独立国のように、壮絶な闘争を経て統治国から独立した国ではありません。また80以上の島々が南北1300キロにわたって点在するという地形から「国民」というより「島民」という住民気質が強い。人々の「自分はこの国の人間である」という意識が弱い中で、国を1つにまとめて運営していくことが難しい状況にありました」しかしスポーツにおいて、代表選手はどの島の出身であれ1つのチームに所属する。そして勝利という同じ目標に向かって力を合わせ、全力でプレーする。それがオリンピックなどの国際大会であれば、各国のチームと対峙していく中で選手たちは相対的に自分が「バヌアツ人」であることを意識し、選手を庇

援するバヌアツの人々もまた、自らを「バヌアツ人」と感じている。国民意識の創成に苦慮するバヌアツにおいて、スポーツが「バヌアツ人」というフレームワークの創出に機能するのだ。「バヌアツ以外の南太平洋の国々も「国家のカタチ」を模索する事情は同じ。こうした国々の開発(Development)と結び付けて検討される時、スポーツは大きな政策的課題として捉えられ、その意義について様々な議論が沸き起こることを予感しました。そして今、スポーツを通じた社会開発(Development through sport)は各国で盛んに行われるようになっていきます」

### 途上国の課題を 解決するなら現地の泥に 塗れる覚悟が必要

先生が語る通り、現在「Development through sport」の意義は政策においてもはや自明のもの。さまざまな競技で国際大会が行われるようになり、途上国でもそれぞれの開発と分

ちがたく結び付きながら、スポーツの振興とそれを通じて社会課題の解決を目指す「スポーツ×開発」プロジェクトが展開されている。

しかし先生はその風潮に違和感を抱く。「支援を提供される側の実情がほとんど顧みられていない。例えば、日本のある公的機関は途上国に日本型体育を普及させるプロジェクトを行っていますが、現地の人々がどんな危機に直面しているかの検討は不十分です」

多くのプロジェクトが目標として設定しているのが、SDGsにも挙げられている「貧困の削減」である。けれど、何年にも相当する時間を途上国で過ごし現地の関係者と活動してきた先生は、先進国目標の「スポーツ×開発」は貧困に対峙するバランス感覚に欠けている、と言う。「貧困の削減を目指すなら、現地の実態を理解する必要があります。それは、自身も現地の泥に塗れる覚悟がなければできないことです。推進する側の「人道的に重要な意味がある」という善意の感覚のもと、人々の感動



2019年にベトナムで行われたプロジェクトの1シーン。  
ラグビーの普及とともに、女性の社会的地位の向上を目指すもの。

を呼ぶストーリーが散りばめられたプロジェクトもまま見受けられますが、そうした「共感」を重視する姿勢は途上国のさまざまな問題を覆い隠し、「貧しい人たちの生活を改善する機会をスポーツでいかに提供するか」という思考を後回しにしてしまう。先進国の人々の共感を獲得しなければ生活できない、そんな人々がいるのなら、彼ら彼女らが他人からの共感に拠って立たなくても生活できる社会を実現すればいい。そこに『スポーツ×開発』が行われるべき理由があるのです」先生の口調は熱



Jリーグにおいて、2018年より展開されている社会連携事業（通称：シャレン!）は、「福+プロジェクト」の仕組みが参考とされている。

く厳しい。「貧困の中で暮らす人々が何と闘いその事態は何から生じているのかを見極め、彼らが直面しているものにスポーツでいかにコミットするかを考え抜く。大切なのは共感と呼ぶことではなく、貧困を削減するための仕組みをつくり上げることです」

途上国への援助活動は当然のものと受け止められているが、そこで暮らす人々にとって本当に有効な援助を実現するためには「援助の先に何が起こるのか」を見つめる視点も不可欠、と先生は続ける。「残念ながら、

開発を推進する側とそれを受容する側との間にどのような齟齬が生じるのかを考察する研究は少ない。『スポーツ×開発』にどのような課題が伏在し、またどのような活用可能性があるのかを、今後さらに追究したいと考えています」

## 学生がプロジェクトの主体を担うことも

スポーツ社会学のゼミではあるが、スポーツ経験を所属の必須条件にはしていない、と先生。「この分野に取り組む際はスポーツをいったん自身の体験と切り離し、社会的な文脈と関連付けて捉える必要があります。それに、学生間の口コミでは僕のところはいわゆる「ガチゼミ」に入るらしく、学び以外のことで忙しいとゼミで活躍するのは難しいかもしれません（笑）」

4月のゼミスタート時には徹底的なチームビルディングを行い、また専門家に問いを投げかける際の作法

といったさまざまなソーシャルスキルをレクチャーして、学生たちが考え感じたことを自由に発言し、トライ&エラー&リトライが最大限できる環境を用意。積極的にチャレンジし失敗しながらも、そこから学んで成長していく力を学生の中に育てている。

研究活動の現場にどんどん学生を参画させるのも小林ゼミの特徴。2014年からは毎年、秋田県で活動するサッカーJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田と協働で、高齢者の運動機会の創出や、多世代が交流する機会の創出を旨とする「福+プロジェクト」を展開しているが、この活動の主体を担うのもゼミ生たちだ。イベントなどを1から企画し、準備や当日の運営などもすべてゼミ生が行う。

当然のように、学生たちと先生との連携は密だ。在学生はもちろん多くのOBOGから相談が寄せられ、時には手弁当でその活動に引っ張り込まれることもある、と先生は苦笑する。しかし明るく包み込むような温かい眼差しからは、頼られることの喜び、

そしてそれぞれの場所でアグレッシブに行動し、自らの手でより良い社会を実現しようと力を尽くす“人材を育てている、という確かな手応えを覚えていることが感じられた。

## 高校生の皆さんへ

近年、変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、曖昧性 (Ambiguity) の4つの頭文字で特徴づけられる「VUCAワールド」という言葉が使われ始めています。既存の枠組みに収まらない未知の状況が次々と生じ、これまでの延長線上にある視点では予測できない事態が各地で起こる。コロナ禍はまさにその典型例といえることができますが、こうしたVUCAワールドでは自分で考え判断・決断し行動に移す力が強く求められます。複数の視点から考えることがさらに重要になっていく時代において、総合政策学部はまさにうってつけの学びの場。このキャンパスでお会いすることを楽しみにしています。